

カミと国文学

齋 藤 清 衛

日本語の「カミ」は、万葉文字で、「可見」「可美」「可尾」「可味」「可未」「加美」「賀美」などと書かれているが、一般に「神」（或は神祇）と書くのは、漢文字を宛てたものであることは明かである。しかしカミの語源については、古来から異説が多く「カガミ（鏡）」の略音とか、また「カビ（牙）」の変音とか様々の説があって決定しがたいが、おおむね東雅（新井白石撰）の説が常識として採用されている。

神カミ，上古の時，神といひしは人也。日本紀に，神聖神人等の字を読みてカミといひし，即ち是れ也。我が国の語，汎称してカミといふは，尊尚の義也。

従って君上官長をカミと呼び，頭髮や遠い物また高い所をもカミと称し，まして斯く人の神聖なる，これを尊び称してはカミといひ，また大神とも，大御神ともいひける也（巻四）

と解釈されている。日本書紀に、「神聖」「神人」「人」などの字を用いて何れもカミと読んでいたらしいことは、諸家の研究ほぼ一致している所である。天つ神はアマツカミ，国つ神はクニツカミと訓んだということになる。

ただし、漢字の「神」と国語の「カミ」とはその語義において多分のずれが出ている。漢籍に用いられた神は、鬼神乃至靈魂の意味のものであるが、わが神話に見られるカミは人間を指す場合の多いこと諸書の示すとおりである。もっともわが民族のカムナガラ（神随）が、キリスト教の神，仏教のホトケと同義でないことは、宗教哲学，宗教心理学の上からのみ立証することのできない点である。すでにローマ（Roma）のラクタンチウス（Lactantius）は *religare*（紐帯）が *religion* の原義だと説明しているように、俗人が聖なるカミを信頼して、祈願し、礼拝する交渉をもって、カミと民族と

がともどもに成長した跡を辿りえられると云うのである。記紀風土記などの神話は、人間的であって、中国の「神」ラテンの **deus** スペインの **dios**, イギリスの **god**, ドイツの **Gott** のように絶対の力は持っていないものとも見られる。しかし、ギリシャの神々のように、カミは超自然的に一元化されていない異国の神話も多い。Hesiodos が神統記 (Theogony) の中で述べているのを見ると、宇宙開発の初めに混沌 (Chaos) として暗黒の中から大地の神 **Gaia** と深谷の神 **Thartarus**, また愛の神 **Eros** などが生じ、やがて、暗黒の夜や、天光輝く昼のできた後、**Gaia** が天空、山岳、河海等を生み、さらに数対の男女神 (総称 **Titan**) も現われてきたという筋には日本神話のカミの発生に甚しく類似しているものがある。

日本書紀 (第一) には以下のような解説も書出されている。(便宜原漢文体を訓読して和漢混淆で示すことした)

古へ天地未だ別れず、陰陽分れざるとき、渾沌たること雞の子の如く、溷^く滓^じりて牙^まを含めり。其の清^{きよし}み陽^すなるものは、薄^{たなび}靡^かきて天となり、重^{おも}く濁^なれるものは淹^つ帯^つきて地となるに及びて、精^{くは}しく妙^{たへ}に合^あへるは搏^あぎ易^{やす}く、重^{おも}く濁^なれるが凝^{かたま}りたるは場^かり難^がし。故^ゆれ天^か先^かづ成^なりて地^ち後^ごに定^さまる。然^{しか}して後^ご、神^{かみ}聖^{せい}其^{その}の中^{なか}に生^なれます。故^ゆれ日^ひく開^あ闢^{くわ}の初^{はつ}めに洲^{しゅう}墟^この浮^うび漂^ひへること、譬^{たと}へば猶^{なほ}遊^{あそ}ぶ魚^{いそ}の水^{みづ}の上^{うへ}に浮^うべるがごとし。時^{とき}に天地^{てんち}の中^{なか}に一^{ひと}の物^{もの}生^なれり。状^{かたち}葦^{あし}牙^かの如^{ごと}し。便^{すな}ち神^{かみ}と化^なる。国^{くに}常^{じょう}立^{りつ}尊^{そん}と号^{なづ}す。

(至^{いた}りて貴^ききを「尊^{そん}」と日^ひひ、自^{これ}余^{より}を「命^{めい}」と日^ひふ。並^なに美^み孝^{こう}等^{とう}と訓^しむ。下^{しも}皆^{みな}此^{こゝ}に倣^なへ)

次に国^{くに}狭^せ槌^ち尊^{そん}, 次^{つぎ}に豊^{とよ}斟^{くみ}停^{てい}尊^{そん}, 凡^{みな}て三^{さん}神^{かみ}ます。

とある。この書紀には、「一書に日く云々」と異伝を精細に掲げているので、最初の神「国常立尊」の御名が「国底立尊」とか「可^う美^{まし}葦^{あし}牙^か彦^{ひこ}尊^{そん}」などと別伝されてもいる例もあり続々群書類従の「神皇系図」に国常立尊の名義を无上極尊だと称しているものもある、混沌から創造された宇宙自然の第一人者であって、地球上における人類新生の状態を想像して書いたものとも云える。その後これら三神は七神となり増加して八百万神の世界が出現した。

その最初の統率者が女神天照大神であったことも、古事記などの神話で明白とされている。

風土の関係から、この島国に移住してきた民族は、比較的早く群集婚姻 (Group Marriage) 時代を脱却し、母権時代 (Period of mother right) に入りえたことは、古事記の内容によっても傍証されるが、種族の点から、アイヌ族、満州蒙古朝鮮に先住していた出雲族や筑紫族、黒潮を利用して南方から太平洋沿岸に上陸したらしいマレー族、その他紀元二三世紀に亘り弓月君などに引率され移民してきた漢民族などの各々別族の如くみて大和民族の発生を解する古学者もあるが、これら諸民族は、東亜大陸に分散していたが、渡来程なく混血したものと看するのが最も妥当であろう。人類学者シュレンク (Schurenk) は、アイヌ族の原郷はアムール (Amu Daria) 地方であるとしてもいち早く北方から日本島に移住した種族であり、古事記に見える「つちぐも」「くず」その他、「えみじ」と呼ばれているものなどと祖先を同系にした民族であろうと考えられる。

昨年のこと桜井光堂氏は「古事記は神話ではない」の著書を公表された。古事記神話をわが国の古代史書の一分野と解釈する立論は、必ずしも革新的の説とは判断しがたいかもしれぬが、神秘的解釈に偏しすぎた国民は、更めて反省すべき契機を含んでいる新研究である。天照大神の子孫瓊々杵尊が天孫降臨により、筑紫 (或は高千穂) に占居するまでの高天原は、果してどこにあったものか。上掲の著作には、「天とは朝鮮のことである」という題目があって高天原の語意を以下のように解釈している。

——タカマノハラの高には、以上のような権力的遠距離の意味がこもっている。

さてそうすると高は権力者、宗主の方^{かた}をはるかに望んでいう言葉である。

アマはすでに見たように三通りの解釈があるが、この場合は馬 (マ) であると私は考える。マの種族とは、馬韓をさすのが、馬にのる種族か、いまのところどっちとも判断できないが、おそらく、馬 (マ) というカラ

族、朝鮮人をさしていると見てよいであろう——。

もちろん、天孫降臨以前の大和民族が、特に朝鮮半島を本拠としていたという資料は無いのであるが、高天原とは、大和民族が海を越し空高くその原郷を追慕して、朝鮮、満州、漢国（中国）などを一括指しているものと考証される節も多い。従ってカミは、国民に共通した祖先崇拜精神に連らなっている。記紀神話について、仏教のホトケ、キリスト教の神に比較して、一神教的宗教内容の稀薄である点を指摘する説がある。これは、釈迦や基督に比較して、日本のカミが拙劣とか不鮮明とかであることを意味しない。古史通に神とは人也。我が国の俗、凡そ其の尊ぶ所の人を称して加美といふ。古今の語相同じ（一）と出されているのは、カミを絶対視、神格化しないだけの理由からであって怪神あり邪神ある中にも崇拜に値する有名神は、祖先神として氏人から尊敬を受け、更に天照大神をもってそれら各氏神の統率カミと仰いだのである。古史通の中に三十二部の神名を列挙しているが、天櫛玉命は鴨^{あかたぬし}原主等の祖、天道根命は川瀬直^{あたひ}等の祖、天神玉命は三島県主等の祖先などというようにそれぞれ説明されている。従って、同書には、天武天皇紀を引き高市社、牟狹社、村屋社の神たちが戦の功績によって位階を給わったとか、孝謙天皇紀を引いて八幡大神が一品になり、比咩^{ひめ}神が二品に敍せられた先例などをも挙げている。

そこで天武紀で連想されるのは、高市皇子の城上^{あらしのみや}殯宮について、かの人麻呂の詠じた計149句という万葉集最長の長歌である。誰もが推賞している如き名作であるが、冒頭の十数句を引用して見ると、（訓法は万葉集略解によった）

かけまくも ゆゆしきかも 言はまくも あやに畏き 明日香の 真神の
原に 久方の 天つ御門を ^{かし}懼こくも 定めまつりて 神さぶと 岩隠れ
ます 八隅しし 吾が大王^{きみ}の

とあり、次に戦争に神徳のあったことを、

わたらひの ^{いづき}齋の宮ゆ 神風に い吹き惑はし 天雲を 日の目も見せず
^{とこやみ}常闇に 覆ひ賜ひて 定めてし 水穂の国を

と詠じ、そこを城上の宮として、神^{かむなびら}随しづまりましたものと、諷詠してい

る。かく死者がカミと化することを信じ、カミは祈願に従って人々に神助を垂れ給うという観念を持ったことは必ずしも珍しくない。ここに来て、カミは人でなく、生ある人間とカミとの分離だとして看られる。神祠が建てられ、祭祀が催され、祈祷祈願が重んぜられてくる。この傾向は、先学者の述べているように、明きらかに欽明帝即位十三年に、百濟聖明王が輸入した仏教に依るところが著しい。時代の変遷と共に、祖先崇拜を主眼とした「神かがら隨」「惟神」が、信仰宗教心を加味して「神道」という新語をさえ用いるに到ったものである。「神道」と殊更に道字を用いたことについて伊勢貞丈は、

日本紀用明天皇紀に天皇信フ仏法フ尊フ神道フ云々。孝徳天皇紀に信フ仏法フ輕フ神道フ云。神道の二字爰に始めて見えたり。これは神祇を崇め祭る事を神道といへるなり。文を對つにせむが為に、法の字に対して道と云ふ也。中古以来、正直の二字を宗旨にして建立したるを神道と云ふ也。（安齋雑話）

などと論じている。従って「神武権衡録」（松下郡高著）の筆者のように四書にも五経にも、孔子も周公も、儒道といふ事をいひたる事はなし。道は自然の道にして、神あれば道あり、儒あれば道あり、仏あれば道あり、道の一字に拘はりて彼は論ずるに及ばぬ事也。孫子が兵者詭道也と書きたるも、軍家にまま有る事也。今の人「若衆」の事を「衆道」といひ、女の事を「女道」といふにあらずや。是れ等は道の字を付けていふは、猶猶太宰（註、春台なご杯が管見の学にては、古代より此の国になき道と思ふべし。男女の道あればこそ天子より庶民に到るまで、子孫榮え血流連綿として絶えず。況や神道は神代より此の国の道なれば、道といふ字を旧書に記さずとも知れたる事也。

と、名に道字を附することの可否にのみ障こたわる理由もないだろう。記紀などの古典研究から、近世国学者が「古道」と自称したのは、自ら万葉集にカムサビ、カミコトヨセ、カムカラなど讃神の心得を包含した語の多く見られるのも自然である。天明、日月を仰ぎ讃える思想は、アジア諸民族に共通するものであをが、儒仏両思想の点において、大和民族は支那朝鮮文化の啓蒙を

受けなければならなかった。しかも民族固有の尊神観念を、かかる讃仏儒の外来思想といかように調和すべきものであったろうか。すでに欽明天皇さえ、仏教に無量無辺の福德あるとの旨に若干の疑惑を抱かれて群臣の意見を聴かれたことがあり讃成派の蘇我氏と反対派の物部氏とが対抗した事件に困られたこともあった。しかし進歩派が優勢の中にも、用明皇子聖徳太子のように史上無比の天資聰明な仏教信者が現われ、用明天皇のために法隆寺という、従来のカミの祠とは比較を超えた大寺院を発願建立されるに到った。特に奈良京天平時代に花と咲いた仏教の隆盛は更めて説くを要しないところである。が、民族はウブスナカミとして持ち続けてきたものを放擲したのではない。中世に降ると、カミの教えは「宗源神道」「唯一神道」その他「両部神道」「卜部神道」等の各派に分たれたが、その起源は、中古王朝のカミの道に求めることができる。例えば、

弘法大師ノ行ハレタル真言ニテ元来宗源ノ神ニ合スル也、金剛界、胎蔵界ノ両部ヲ神道ニ習合シ、又ハ一明神ト立ツハ一社ニモ内外アリ、明ノ字ハ日月ト書キイハレタリ。

とは「神祇正宗」に見える一節であるが、両部習道と云うことは、中世代の附会論であるとしても、伊勢神宮、賀茂明神、春日神社などの高格な神社など、剃髪の敬神僧の参拝を許容しているのが実情である。これは、民族性の中に宗祖のカミを尊ぶ伝統が力強く根付いていたからだと思わねばならぬ。すなわちこの場合、カミを重んじ尊ぶことが仏教普及の結果とのみ軽く判断することは、思いすぎであって、原始時代からカミの観念には、自然現象や生命に係わる畏怖心の萌芽があり、生活に係わる高山のカミ、大河のカミ、海のカミ、島々のカミ、けつ（狐）のカミ、おおカミ（狼）、風のカミ、カミなり（雷電）、へみ（蛇）のカミなどは、それぞれに恐惶すべきものとなったからである。そこで、民族が祖先のカミを尊敬する心理と、これら自然神を崇拝するに到った心との間には甚しい差違は見出され難い。一般には、一神教は人類が文化展開して精神的に生きえた後の成立だと考えられているが、むしろ、最上位の天照大神に対する「まつり」があって、漸次、他のカミが

その周辺に附着していった形と解されるであろう。上代の旅人が、陸では峠、海では波荒れる岬にカミのいますことを信じ、旅の無事を祈った心があったがそれは、光明皇后が奈良の大仏を建立され、その慈悲にたより給うたそれと変るところはない。神仏両面は跪拝の形儀こそ変れ、純粹な感性においては相互に接近している。万葉集の編者が、カム之味（巻四）カミ佐備（巻十七その他）カミ柄（巻二その他）カミ隨（巻二、巻十八）などの用語をもって、神性・神威を示しているのもこうした広範の視野に係わっていると思われる。

いわゆる祝詞は、美辞をもってカミを賞讃し幸福を与えられようとする祭祀用の詞であるが、もともと祝詞とは古事記（上）の布刀詔^{ふとうのりごと}戸言^{とご}また書紀（神代卷）の「太諄辞^{たのこご}此云^こ「布斗能理斗^{ふとうのりごと}」の宣言^{のりごと}の敷衍されたもので、神勅により祭祀が宣読するものであって延喜式所収27編の定型化を見るまでには、いろいろに文辞にも変遷があっただろうことは否みがたい。が既に文武天皇紀に出る別式の成立時代以後は、基本的変化と云うものは無かったものと思う。その中の「祈年祭」の如き、早く飛鳥時代から行事とされたものであり、その祝詞の冒頭が以下のものであることに、古道研究者は注目している。次は祈念祭祝詞の起句。

うこなはれる 集侍 神主、^{はふり}たち^{もろもろ} 祝部等 諸^{きこしめせとのる} 聞食登宣。高天原爾^に 神留坐^{つまりますすめむつ} 皇睦神漏伎命、
神漏弥命^{もちて おまつ}以、天社、^{くにつ} 国社登称辞^{とたたへことまつ}竟奉

祈年祭は、その年の五穀の豊作を祈る祭であり、^{のりごと}宣言はその祈願祝頌の文辞である。中臣氏忌部氏が代々声誦することでも推察されるようにその祭儀が国家的政治制に関係を持っていたことも認めてよい。卜部慈遍は神道十目の中で、祝詞の本義を評して、

天ノ意ナクシテ、千草ヲ潤ホシ、地ノ思ヒナクシテ、万物ヲ保チ、又風ノ分別ナケレドモ、一切ヲ人トシ、雲ノ差別ナクシテ、衆像ヲオホフガ如ク、民ヲ化スルニ悪愛スルコトナク、治^レ世偏頗ナク、道ヲ知りテ徳ヲ施シ玉フヲ皇祖トハ申ス也（「豊葦原神風和記」上）

と、宗廟社稷之靈、得一無二の盟あることを究明しているが、例えば大祓に

つき「後世の神官等、仏徒の大般若経を転読するに倣ひ、信徒の依頼にまかせ、祓修行など唱へて、神前にて数度読上ぐるを習」としたものと論じている。また小中村^{きよのり}清矩は、敢てカミの祝詞と見てもその本義を傷けるものではないといっている。敬神に聖俗の別あることは根本的に免れ難い。仏教は六道輪廻、諸行無常の観念を中心とし、キリスト教正統派は、原罪を背負うた人間観を主眼とするだけのものである。カミと人との差隔をあまり知らなかった古代の日本民族が、釈迦仏の救済を知るに及んで、その成立の内容に関心を持ったことも当然ありうことである。しかし、古代から中古中世にかけて、「カミ籬」「カミ^{なび}奈備」「カミと^{みやの}宮居」などと呼ばれる社祠は、時代を遡って増築され、清浄を愛する心から、神人^{みま}や巫女^{みま}によって、^{みま}禊^{みま}祓^{みま}を祭儀とする風習を増長せしめたのであった。万葉集の中、カミを唱した歌は数十首もあるが「皇^{すめろぎ}祖^の能^のカミ^{のみこと}能^の大^{のみこと}御^{のみこと}世」（卷十八）「皇^{すめろぎ}祖^の之^のカミ^{のみこと}之^の御^{のみこと}門」（卷十一）（卷四）「天^{すめろぎ}皇^の之^のカミ^{のみこと}之^の御^{のみこと}言」（卷一）「皇^{すめろぎ}祖^の神^の之^のカミ^{のみこと}乃^{のみこと}御^{のみこと}言」（卷三）「須^{すめろぎ}売^の呂^の伎^の能^{のみこと}可^{のみこと}未^{のみこと}之^{のみこと}美^{のみこと}許^{のみこと}登」（卷十八）「須^{すめろぎ}売^の呂^の伎^の能^{のみこと}カミ^{のみこと}能^{のみこと}御^{のみこと}代」（卷二十）「皇^{すめろぎ}祖^の之^のカミ^{のみこと}之^の御^{のみこと}代」（卷六）などある「皇祖のカミ」は天照大神及びその御子孫の諸神を指しているが唯「すめろぎ」「すめろぎのみこと」とのみ云っている例もある。観念で造りあげたカミでなく、何れも人間味の漂いあふれているカミなのである。農民農作の祈願を受入れてくれもし、恋愛の達成に協力してくれ、もしまた、旅の安全も保ってくれる神である。

乾^{かみつよ}地^の乃^のカミ^の手^の侍^の而^の吾^の恋^の公^の似^の必^の不^の相^の在^の目^の八^の方^の（卷十三）

阿^あ米^い都^と知^ち乃^のカミ^の乎^の伊^い乃^の里^の弓^の佐^の都^の夜^の奴^の伎^の都^の久^の之^の乃^の之^の麻^の乎^の佐^の之^の豆^の伊^の久^の和^の例^の波^の
（卷二十、防人使作）

かかる神人間の親近さは、「あめつちのカミをこひつつ」（卷十五）「カミをこひのみ」（卷二十）「あめつちのカミぞわがのむ」（卷十三）などの用語の中にも現われていて「のむ」とは嘆願の意を表わしている。

しかし生神として社会の尊敬をあつめた聖天子^み武人^{たけ}、賢者^{さとし}等も、免れえなかったのは生きる身の死である。生死^{しじ}観^{かん}は、そのまま魂魄^{たま}に対する絶対信仰^{しんぎょう}につらなってる。「みたまたまひ」「みたますけて」などの句が万葉

集の中にも出てくるが同様である。ここに、人生の無常観から伸びてきた仏教精神が、カミの道と融合する一角を示していることも必然であって、ただカミを祭る儀式は、前記もしたように、清浄なものを愛し汚れを忌む民族性から、年を追うて、地方々々に建立されていったカミの御社の数は、延喜式によると「天神地祇総三千一百卅二座」（神祇卷九）とあり「座」の意義がやや不明瞭であるが、その中に大社が四百九十二座あって、それを三百四座と一百八十八座に区分して記録しているなど、全く無根の指数とは考えられない。延喜式神名帳の注書には、延喜五年十二月廿六日この三千余の神体を一時、如意峰神祇齋場所に集合鎮座せしめ、その翌々日全国六十余州に渡御させて、それに神号を授けるのが聖断による儀式となっていたというのであるから、夙く天つカミ、国つカミの別なども出来て居り、「何社」と「何宮」の命名の違い、「本社」「末社」「別宮」等の格差と同様に社会信神の上に盛衰の別が生じたことは免れぬ現象であった。枕草子の一節にも以下のように出ている。

やしろは、ふるのやしろ、いくたの社、たつたのやしろ、はなふちのやしろ、みくりのやしろ、すぎの御社、しるしあらむとをかし（下略）

なお祭儀に交渉あるは、音楽を伴う舞歌であり、古今集の中には、「大歌所御歌」の部立があり「神あそびの歌」には、とりものの歌（榊、幣、杖、篠、弓、劔、鉾、杓、葛）六首をも撰している。その他四季の歌、覇旅歌の中に、カミ詣に連関した作なども尠くない。

カミなびの御室の山を秋ゆけば錦たちきる心地こそすれ（秋）業平

カミなびの山をすぎゆく秋なれば龍田川にぞ幣はたむくる 深養父

御室山の祭は、史上特に淵源遠いものとされている。しかし後世のような社祠の建築が形式化したのは、かなり中古末期時代のことであって、いわゆる手向の場所は、森とか丘上とか自らに選ばれていたものにすぎないという宣長の考証があたっている。簡単に「かみなびのもり」とか「たむけの山」と呼ばれたものも、祠の有無に拘らず祭場を示した用語であつたらしい。

俗七神道者などいふもの、日本は神国なりなど常談にいひて、神社など

いふもの多く神代よりあるものとおもへり。われつらつら思ふに上古は神社といふものことさらになかりしものなるべく、その神をまつらむとしては、その時時に清浄のよき所を見たてゝ神異を遥拝し、みたまをこひのみ給へりしものにて、後世もり（註、森）のみありて社なき地のごとくなりけむ、丹生川（註、伊勢）上などのさま思ふべし（和歌の浦鶴）

なお古今集には、「神のい垣」及び「神垣」という語が二首に見られる。カミの御社の神聖を保つための垣根である。

千早ぶる神のい垣にはふ葛も秋にはあへずうつろひにけり（秋下）貫之神垣のみむろの山の榊葉は神のみまへにしげりあひにけり（神あそびの歌）すべに万有神教による自然崇拜の根跡が残されている。霸旅部には、手向の山に幣帛を捧げて旅の平安を祈る歌も二首出ている。すでに、前記したように、日常生活の中でカミは警戒すべきもの、畏怖すべきものとも考えられていたが、半面民族性として楽天の面であり、遊覧を好むような性質もあり、それに由来して、カミ詣なども、行事化されていった。名だたるまつりには、神楽見物にまかせる群衆は年を逐うて増加していったのである。

神楽の初は、日本書紀、古語拾遺に見えるところであるが、神楽の歌詞が形式化されるに到ったのは、かなり後世のことだと推される。勅撰第三代の拾遺和歌集には、「神楽歌」の部立が別に加えられている。

榊葉にゆふしでかけてたが世にかカミの御前に祝ひそめけむ

大よどのみそぎいくよに成ぬらむカミさびにたる浦のひめ松

この類の歌を初として、「ながらの山」その他十余首の山を詠じたものが採用されている。多く山の歌といっても社のあるものに係わりその敬頌を内容としたものが多い。後撰集、拾遺集を通し、まつりの歌は、京都の賀茂、奈良の春日、山城の男山、難波の住吉を採りあげたものなど多く、齋宮の伊勢、齋院の野宮、平野祭、大原野祭に関したのもも諸書の中で顕著である。

元旦の初詣は、現代の行事となっており、明治神宮、靖国神社、平安神宮など、参詣者何十万を算したという。その他、地鎮祭、開場式典、船の潜水式などに神官が御禊祓をしてテープ類を切るのは、現代の風習であり、極め

て当然とされている。カミへの信仰とは大半無関係であって、都会人気質の特長をなしている寺詣も、異様の風俗だと見られる。神仏習合とか天地垂迹とかいう宗教観念を抜きとして個人自らは、参拝する対象がカミであるか、ホトケであるかを自識しないものさえも多い。近代に到って、こうした信仰の乱脈さは、著しく表面化したようである。因果応報の仏法の真義など、科学文明や形似下重視の思想ではほとんど無意義に近く忘卻されていると思われる。

とはいえ、ここで自分は、仏教文学の種類多いに反し、カミの文学が藪いことを嘆くものではない。ただし、カミが国民生活にいかような表象を保っているか、その点への明白な認識を要望するものである。仏教、キリスト教何れも、人類文化の一面を代表しているものであるが、人類生活に睿知を掲げ、信仰のないものを誘導する意志をも有している点、人間的純粋愛情表示の面には芸術文芸のそれに及ばぬ面が多い。知性意志性ともに有義であるけれど、中世近世代を通じて喪われた人間性を回復せしめるものは、やはり、感情の流露に超すものはない。少くともわが国民が、将来正路直路を辿り人間復興を企図する以上、国民とカミとの関係を今一層深く反慮すべきではあるまいか。